

「組み合わせ」の技法 —オランダ流ワークライフバランスとは

文・写真
中谷文美

共同研究 ● ジェンダー視点による「仕事」の文化人類学的研究 (2008-2011)

2008年10月より開催している共同研究「ジェンダー視点による『仕事』の文化人類学的研究」の趣旨や課題設定についてはすでに130号で報告しているため、今号では研究代表者である筆者の研究テーマに即して成果の一部を紹介させていただく。

世界最初のパートタイム経済

ヨーロッパの小国オランダといえば、チューリップや風車、あるいは画家のフェルメールやファン・ゴッホが頭に浮かぶであろうが、「仕事」という側面から現代オランダ社会に光を当てた場合、もっとも顕著な特徴といえるのはパートタイム雇用者の比率の高さである。2009年時点で全雇用者の48.3パーセント、女性だけを見ると実に75.8パーセントが週当たり35時間未満のパートタイム契約で働いている (Eurostat)。しかもオランダの場合、不本意なパートタイム就労者の比率はきわめて少ない (OECD Employment Outlook 2010)。こうした自国の状況をオランダ人経済学者フィッサーは「世界最初のパートタイム経済」と呼ぶ。

正規パートタイムという働き方

ただし、ここでいうパートタイムは日本で一般的なパート労働とは内実が大きく異なる。日本のパートタイム労働者の雇用は有期契約であり、その他の点でもフルタイム正社員とは全く異なる労働条件下に置かれるが、オランダでは1990年代以降の相次ぐ労働法改正や新法の制定により、パートタイム勤務といえどもフルタイムと同等の社会保障の対象となる。また、ライフステージの進行や家庭の事情に応じて労働者一人ひとりが現状より少なく働いたり、またフルタイムに戻ったりという労働時間の変更を一定の限度内で雇用主に申し出ることができる。つまり、今の日本でいえばパートというより短時間正社員に匹敵する身分である。

では、オランダでここまでパートタイム就労が一般化している背景にはどんな要因が働いているのだろうか。オランダの人々が日々の生活を送る上で、仕事はどのような位置づけを持っているのだろうか。

ここではまず、筆者が行ってきたインタビュー調査の中からある1人の女性のワークヒストリーを紹介しよう。

1964年生まれの法律家、ジュリアナさん(仮名)は、2児の母親である。大学卒業後、民間の法律事務所で弁護士として10年ほど働き、激務を経験した。結婚後は大手石油会社に勤める夫共々、家で夕食を済ませてからまた職場に戻ったり、週末に仕事することも珍し

くない生活だった。その後夫の海外赴任に伴って一旦退職し、主婦生活を送ったが、自分にとって「まともな」仕事を持つことがいかに大事かを痛感し、2年後に3ヶ月の赤ん坊を連れて帰国するとすぐに次の職に就いた。裁判所勤めでフルタイム契約だったが、1日当たり9時間計算で週4日勤務という形態を選んだ。そこで週5日のうち1日は自分が家で娘の世話をし、もう1日は夫の両親が交代で面倒を見に来てくれ、残りの3日は保育所に預けていた。

2人目の子が生まれた頃は古巣の法律事務所に戻っていたが、子ども2人を抱えた状態では思うように仕事をするのは難しいと感じたため再び転職し、2005年からは中央省庁の専属弁護士として働き始めた。週当たり32時間のパートタイム契約であるが、2006年のインタビュー当時は下の息子がまだ3歳で親休暇 (ouderschapsverlof) を取得中だったため、勤務は週3日であった。同時期に演劇関係のNPOに転職した夫は、36時間のフルタイム契約ながら、以前の彼女と同様に1日9時間×週4日という勤務形態を取り、週末以外にも1日は自宅にいた。そこで子どもたちは月、火は母親、金は父親と一緒に家で過ごし、水、木は保育所及び放課後の学童保育に通うというスケジュールだった。

2010年の再インタビュー時には子どもが2人とも小学生となっており、ジュリアナさんは32時間の契約労働時間を週5日に振り分け、月、火は2時半までの勤務、水は午前中が在宅勤務、木、金は通常勤務という働き方をしていた。そうすれば週の前半3日は子どもを学校に迎えに行くことができるからである。

「正しいバランス」を求めて

上記のケースでは、妻が仕事に対する満足感の追求と自分の家庭状況の変化とを天秤にかけつつ、転職を重ねながら勤務形態も次々に変更する姿が特徴的といえるだろう。子どもを保育所や学童保育に週2、3日だけ通わせることは私たちに奇異に感じられるが、オランダではごく一般的なやり方である。理由としては、もともと慢性的な保育所不足で週何日という単位の申し込みしか受け付けられないことや、日数を増やせばそれだけ保育料が高くなることのほか、公的保育に子どもを全面的に委ねることに対する抵抗感が広く共有されていることも大きい。

かつてのオランダでは女性の専業主婦率が非常に高く、子どもは母親の手で育てるものという通念が定着していた。筆者がインタビューをした1960年代前後生まれの人々は、幼児期はほとんどが専業主婦の母親に育てられた経験を持つ。だが、その後既婚女性の就労は徐々に拡大した。80年代以降、小売業や医療・福祉、教育といったセクターでのパートタイム雇用の増加に加え、失業対策の一環として実施された賃金抑制策により、世帯所得の増大を図る必要に迫られた既婚女性たちが労働市場に押し出されたためである。上記のジュリ



子どもを預かる祖父母向けの育児雑誌。

アナさんの母も、出産と同時に仕事を辞めていたが、子どもの手が離れた後に再開したという。

さらに2000年代に入ると結婚や出産を理由に就労を中断する女性が極端に減るといった状況が生まれた。この結果、年代別の女性労働力率のカーブはほぼ台形型に近づきつつある(図)。

長い間立ち遅れていた公的保育の整備も次第に進んだが、それでもなお、家庭的環境での近親者による保育をよとする風潮は根強い。だからこそ、既婚女性たちの多くはパートタイム勤務を選択する。結婚・出産後にそのまま仕事を続ける場合も、第1子出産後はパートタイム契約に切り替え、週末以外に週1日～2日は家にいられるようにするのである。乳幼児を持つインタビュー対象者の大半は保育所に子どもを通わせていたが、週3日までが限度であり、それ以上の日数を保育所で過ごす子どもはいなかった。多くの共働き家庭は、ジュリアナさんの家庭同様、子どもが保育所に通う日、母親が家にいる日のほか、父親が育児を担当する日や祖父母が孫を預かる日を織り交ぜた週単位のケア・スケジュールを組んでいる。

したがって父親たちの中にも、一時的にパートタイム契約に切り替えたり、フルタイムのままでも週時間単位で親休暇を取得して勤務日数を減らしたり9時間×4日勤務を選ぶなどして、自宅にいられる日を確保する人が多い。職業や個別の職場の状況によっても子育てと両立できるような柔軟な働き方が許容される度合いは異なるが、自分が望ましいと考えるバランスが達成できない場合、別の職場に移ることで解決を図ろうとする姿勢も男女に共通してみられた。

だが、子どもが小学校就学年齢に達する頃から、仕事と家庭責任の間でどうバランスをとるかという点をめぐって夫婦の間の違いが少しずつ顕著になっていく。小学校は全学年を通じて午後2時半～3時には授業が終わるほか、水曜午後は休みになるなど、通常の勤務時間とは相容れない時間割である。そこで母親は子どもの小学校入学と同時にさらに契約労働時間を減らしたり、在宅勤務を取り入れたりするなどして子どもと一緒に過ごす時間を増やそうとする。他方、父親のほうは年齢的に管理職への昇進が視野に入る頃でもあり、親休暇の取得可能期間が終了すると同時に「職場からの圧力」を理由に通常の週5日勤務に戻るケースが多い。この時期を境に、夫たちは仕事への傾斜を強め、妻たちは仕事と子育てとのバランスの重心を明らかに子育てに置いたまま、パートタイム勤務を続ける。

制度上は育児などに充てる時間がなくなってきた時点でパートタイムからフルタイム勤務に切り替えることが可能で



子どもたちの送り迎えをする父親の姿もよく見かける(ライデンにて)。

あるが、実際には子育て後に手にした自由時間を今度は「自分のため」に使いたいと考える女性が圧倒的に多い。

多様なワークスタイルの混在

日本で1990年代末からしばらく続いた「ワークシェアリング」の議論の中で、多様就業促進型、つまりライフステージの進行に応じた家庭責任の遂行と就業の両立が可能になるような働き方に関するモデルを提供するとされたのがオランダであった。その後政府は2007年12月に「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章」を掲げ、引き続き両立支援のあり方を模索している。だが日本の場合、「ワーク=仕事」が「ライフ=生活」(この文脈では多くの場合、家事・育児を中心とする家庭生活を指す)と対置され、育児休暇取得などによる生活上の経験が仕事でも役立つといったレトリックの下に全体の比重はあきらかに仕事のほうに傾いている。これに対しオランダでは、有償労働という意味での「仕事」はあくまでも「生活」の一部であると認識される。人々の日常生活はそれ以外にも家族へのケア、趣味、親族・友人との交流、ボランティア活動などさまざまな要素から成り立っており、いわゆる仕事だけを神聖視する意識は男女ともに薄い。

前述のようにパートタイム雇用者は男性よりも女性のほうに多く、生活総体の中で仕事が占める比重や意味も男女間で異なる傾向が強いといえる。しかしパートタイム就労の拡大は、その他の社会要因ともあいまって、多様なニーズにもとづく多様なワークスタイルが職場に常に混在する状況を生み出したことに大きな意味があるのではないだろうか。現代オランダ社会においては、「組み合わせ」の技法(*kunst van het combineren*)、つまり生活の中のさまざまな要素をいかに自分の望むバランスで組み合わせ、両立させるかというテーマが、性別や年代、ライフステージの別を越えて多くの人に共通する課題となりつつある。

なかたにあやみ

岡山大学大学院社会文化科学研究科教授、国際アジア研究所(オランダ)客員フェロー。専門は文化人類学、ジェンダー論。著書に『女の仕事』のエスノグラフィ:パリ島の布・儀礼・ジェンダー』(世界思想社2003年)、『ジェンダー人類学を読む』(宇田川妙子と共編著 世界思想社2007年)、論文に『From Housewives to 'Combining Women': Part-time Work, Motherhood, and Emancipation in the Netherlands』(『日蘭学会会誌』34(1)2010年)など。

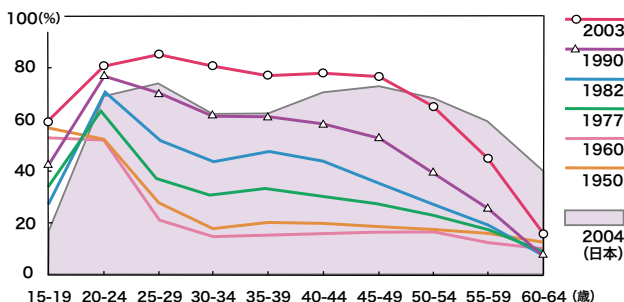


図 オランダ人女性の年齢階級別労働力率の推移(「平成16年版 働く女性の実情」概要、厚生労働省)。